

舞鶴の両墓制

井上正一

「仏式にて葬儀相當みたく云々」などの廣告を見ることがある。一たい仏式とはどういうことであろうか。一般にはその葬儀作法の一切が仏式だと考えられているようである。だが死後直ちに作られる枕飯に、魔よけの枕刀、猫を隣家にあずけることだの、湯灌、納棺の作法や終つてのキヨメの酒だの更に又、出たちの膳、葬送の配役、葬送後門前に出すキヨメの水や塩、それから、仕上げの膳の作法、四十九日目の行事に大きな餅を焼いて血縁の者だけで引きちぎりあつて食う風習、そんなことまで一切を仏式といつてよいのだろうか。こころみにお寺さんに一度聞いてみるとよい。おそらく仏教の教典にそんな風習や作法のことまで書いてないだろう。

仏教渡来以前に日本には民俗のシキタリというものがあつた。仏教渡来後二千年からの久しい間に仏教は日本人の生活に融合してしまい、人々の生活が仏教化したのか、仏教そのものが日本化したのか、今日の日本では日本人本来の生活様式と仏教との区別はほとんどできなくなつてゐる。私は仏教の味方というわけではないがこうした布教態度には感心する。日本においては信者の拡張が困難だと苦しんでいる何とか教など仏者の爪のあかでも煎じてのんでみたらどうか。

両墓制

墓制に両墓制というのがある。死体をいける墓と、石塔をたてて靈魂を祭る墓との二つの墓をもつ制度である。これにたいし、埋葬した盛土の上に石塔をたてて祭るのを単墓と云われている。今まで中央から出された書物によると、丹後地方では熊野郡の葛野に一ヶ所あるきりとなつてゐる。ところが昨年舞鶴市が調査された結果によると何とその数二十五ヶ所。これには筆者も驚いた。

そのアンケートの内容書を見せていただくことができたのでその内容の概略と私でできる範囲の解説を加えてみよう。質問書の内容に不備な点があり、回答を求められた区長さもいささか迷われたようで「そんなことは直接話すのでなければ、文書での回答などできない」と書いているものもある。只今再照会をしているのでここでは確定的な報告ができない。ほんの概要しか述べられない点を御承知願いたい。

両墓制を存置する土地

舞鶴市では海岸に近い部落に多く、海岸に遠い土地にはない。まず東舞鶴駅裏の与保呂部落、東北方に廻つて多門院、堂奥、松尾寺駅近くの安岡、白屋、杉山、登尾、次に日本海沿岸に飛んで田井、成生、ずつと海岸すたいに西廻り、野原、三兵衛、瀬崎、大丹生、千歳、佐波賀、引揚援護局のあつた近くの平、次は東舞鶴市街の西方北吸、それより西舞鶴へ向う道路を下つたところが余部上、次は西舞鶴市街地よりやや南方に女布、それから舞鶴湾の西側海岸へ廻つて大君、白杉、由良川鉄橋の東詰の油江がある。

名称

死体を埋める墓を第一次墓、石塔を建てて靈魂をお祭りする墓を第二次墓と云われているが、舞鶴市では第一次墓の名を「ミバカ」

というのが成生、田井、白屋、杉山、佐波賀北吸それから「サンマイ」と云うのが野原、大君、与保呂など、「ウメバカ」と云うのは大丹生、三兵衛、千歳、安岡、堂奥などの部落である。石塔の建てられている第二次墓を、「マイリバカ」と云うのは岸谷、余部上、大丹生、野原、瀬崎、安岡、白屋などで、田井では「マイリ墓」とも「石塔墓」ともいう。「セギドウバカ」と云うのは成生、三兵衛、千歳、平、佐波賀、多門院、堂奥、北吸、与保呂などであり、白杉、油江では「ラントウ」又は「ラントウバ」といつてゐる。

全国的には第一次墓を「サンマイ」「ノバカ」「イケバカ」「ウメバカ」「ミバカ」などが多く、第二次墓地を「ラントウバ」が断然多く、「ヒキバカ」「マイリバカ」などがある。

両墓の位置

第一次墓は第二次墓に比して人里をより遠く離れた所に位置している場合が多いが、舞鶴市ではあまり遠く離れてゐない。せいぜい四五百米のところが多い。第二次墓は全国的に家の近くにあるものが多いが、舞鶴でも同じ傾向である。第一次墓と第二次墓の距離は同一地に一〜二米離れて設けられたものもある。

が(平、安岡、佐波賀、多門院、北吸)多くは一千米以内の距離のようである。部落共同墓地であるというのが半数、残りは個人所有地であり、埋墓は個人墓だが、石塔墓は共同墓(余部上、田井)というのものもある。

墓標

第一次墓地には墓標として永続的な性質のものがないのが本来の特徴であり、盛土をしたままが多い。第二次墓には石塔を建てるのは一般的であるが、この石塔を建てる風習は近世以降であり、それが普及しはじめたのは更に年代がよほど降つてからである。庶民の墓地では元祿、享保より古い年号の入つた石塔はまれである。この石塔を建てることのものであつたか。この点は学者の間でもまだ確かな解答は与えられてゐない。

瀬崎では第一次墓に浜辺から丸石二つ拾つて来て盛土の上に一ヶを台とし、一ヶをその上に立てて置く風習だと報じられているが、その他の各部落では盛土をしただけの姿であるらしい。

第一次墓にまいる期間

石塔を建てた時から以後は第二次墓のみへまいる(余部上)死後四十九日又家により一

年忌より以後第二次墓にまいる(千歳)盆だけ両墓にまいるその外ときは埋墓へまいる。(堂奥)などもあるが、不明の回答が多く再照会中、一般的には石塔を建てる時期が区切りとなつてゐるようである。ところが両方の墓へいつまでもまいるという回答が十一ヶ所もあつたが、これは両墓制がすでに崩壊期に入つてゐるものと考えられる。

引

第一次墓から第二次墓に移す「ヒキバカ」の慣習について、岸谷では一握りほどの土を第二次墓に移し御経をもらうと報告されているが、調査が不十分でその他の部落のことはよくわからない。再照会中。

北吸における実例

北吸は江戸時代には「キタシウ」又「キタシユク」と云つて「北宿」の文字をあて現在のように北吸とは云わなかつた。

明治二十二年にこの地に軍港がつくられ、鎮守府の敷地予定地とされた北吸村の一部と余部村の一部が二ヶ年以内に立退きを命ぜられ墓地もろとも現地に移転した。お寺は遠く江戸時代には大浦の真言宗多禰寺の壇下で、寺への往復は舟が用いられた。あまり不便なので三百年程前、禅宗の徳月院に代つたが新

加入壇下として扱いはわらくついに松尾寺のきもいりて同寺末寺の真言宗大聖寺を北吸に移してこの壇下となつた。
墓は江戸時代から両墓制であつたが明治二十三年現地へ移転のときも昔あつたそのまま、骨は掘り上げて新埋墓へ、石塔は新石塔墓へ移した。このように移転の際でも単墓には直さなかつた。

明治二十三年村の移転前までは川石がたやすく得られたので初七日頃川から五〜七個拾つてきて埋墓に置いたが、今は附近にこうしたきれいな石が得られないのでこの習慣は続いていない。現地を見るに埋墓にはまんじゅう形の盛土が沢山あつて、それに盆に立てた竹の花立てが残つているだけであつた。お盆などには埋墓、石塔墓の双方に花を立ててお祭りするが、年忌の塔婆は埋墓の方に立てる。また葬礼の時の供膳、位碑、ゴハイ(上家)などは埋墓の上に置く。最近火葬にかわつてきたがやはり骨を埋墓にいけるので土葬の頃とかわらない。

現在の傾向

死と同時に人の魂は肉体から離れて、四十九日の間は母屋の屋根の辺にうろついているのだとの俗信がある。これはわれわれの祖先

のかなり古い思想ではなからうか。当初祖霊崇拜にはこの靈魂を祭ることが主であり、死体は腐りウジがわくから「ケガレ」である。だから遠く離れた別の墓地に埋め、靈魂を祭る墓は別につくるといふ思想から行われるようになったのが両墓制であるといふ程度のこととは想像できるが、今のところはつきりした起原や墓制の内容はわかつていない。
古くから火葬の行われている土地には両墓制がないといふことだけは確かだと云われているが、いずれ舞鶴地方でも火葬の普及とともに両墓制は消滅の運命をもつと云えよう。

真名井の清水について

京都府立西舞鶴高校 地歴クラブ

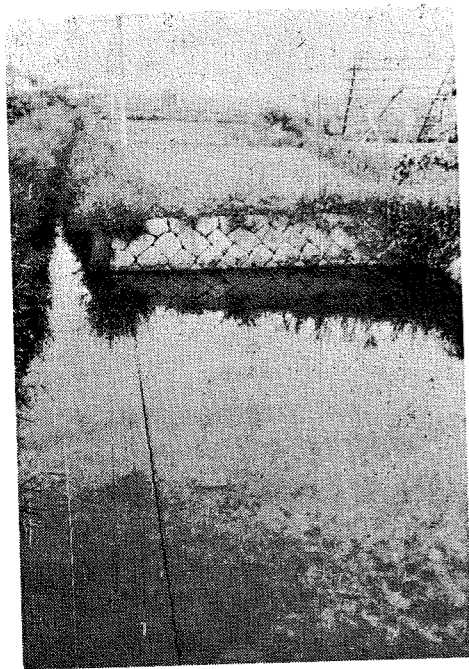
「初めにあたつて」

私達地歴クラブに貴重な「舞鶴地方史」誌の一部をさいて下さつたことをクラブ員一同たいへん感謝しております。この研究にあつては、クラブ顧問の坂根・川端両先生に、多大の御指導をいただきました。研究内容は真名井の清水が市民生活に及ぼす色々な影響

丹後一円の両墓制について調査中で、只今官津市の分が判明した。舞鶴市ほど多くはないが舞鶴市に接近した地点や橋北方面にある。このように海岸ぞいの土地に多いのは丹後だけの現象で、他地方では海岸と山間の差はない。
ここに注意すべきは舞鶴市の東隣、福井県の大飯郡にやはり海岸に面した大島、加斗、本郷、高浜などの町村に両墓制のあることである。
(本稿では「郷土史辞典」を参考にした)

について調べてみました。

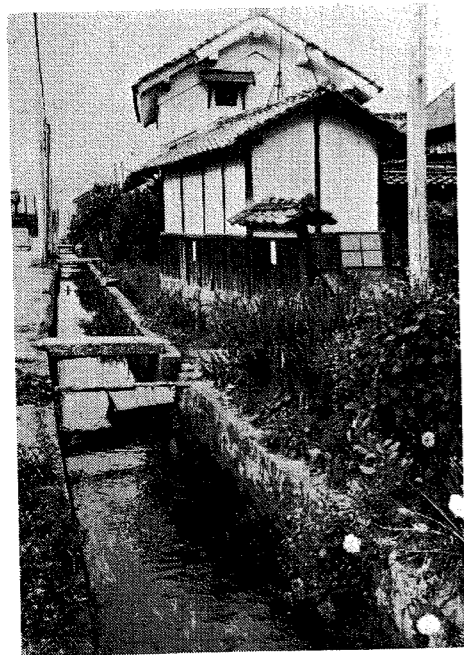
例えば、飲料水としての利用や田畑に及ぼしてきた影響、それに対し農民の立ち向かつてきた歴史、農民の家内工業としての紙漉業など舞鶴地方に及ぼしてきた水の歴史は、農民の生活だけでなく商工業の上にも多大の影響を写えてきたことは、周知の事実です。



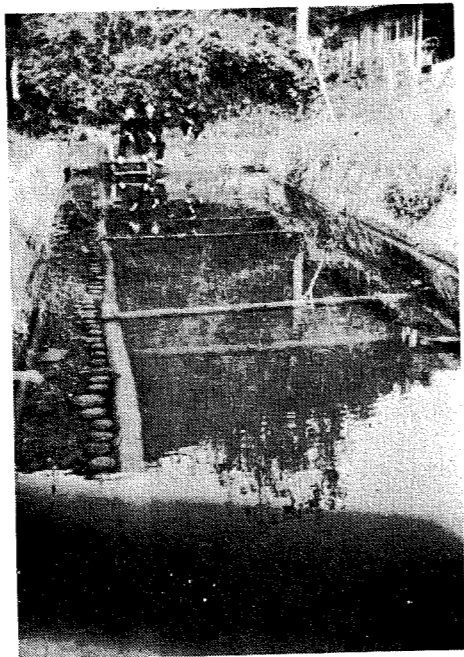
八尺池



真名井の清水



お水道



しゅうず